

土筆

第65号

土筆集

梅雨霧の重さに山の沈みをり
老鶯の遠音の更に遠くなり
待つてゐる時は鳴かざり時鳥
前橋 角田 房枝

何度でも蜘蛛の子散らす所作をする
追跡の及ばぬ距離や蟻の道
五月闇あまたの命育みて
高崎 福田 信子

清流の真中の岩に川蜻蛉
這ふ岩と同じ色してかたつむり
白樺の林を動く夏の霧
前橋 竹内 友子

葉の色と同じ青柚の固き意思
紫陽花の青に拡がる空がある
磧石白く輝く五月晴
高崎 天田 利子

蟻地獄期待はせぬと平常心
蟻地獄気長な時を満喫す
蜻蛉生れ透明な色背負ひたる
藤岡 細谷 志帆

喪失の梅雨にけぶれり寒山寺
花合歓や道見失ふ古都の昼
葉柳に蘇州の壁の揺れにけり
高崎 松島 律子

野仏に誰が供へし実梅かな
梅雨明けや眩しき池に雑魚跳ねる
山つつじ尾根一面に色を添へ
沼田 林 昭風

生を受け時折動き蟬となる
雲の峰赤城の峰を覆いたり
緑陰に蝶の来たりて羽休め
前橋 田村 松嶽

あじさいのベッドの上で虫たのし
苦勞して中のビー玉取るラムネ
天道虫星と頭と数かぞえ
桐生 田村 智義

蚊遣香白き煙の姿追い
空蟬の主さがして枝見上げ
つくばいのラムネにさわり水ゆれる
前橋 齊賀とうこ

極上の風吹き抜ける夕立後
切れさうな草かき分けて夏の川
日焼して部活の少女鍛へられ
高崎 門倉 博子

かなぶんの昼の顔して森共生
河原道ひとり辿れば草いきれ
着地した筈の草矢の残る指
高崎 吉田 鈴江

何もかも眼に光る暑さかな
怖いなど言ってはをれず網戸の夜
鼻筋を眼鏡のすべる暑さかな
前橋 小林かな

青空に姿現す雲の峰
夏椿散って舗道を色づけり
冷奴酒豪の父を忍びをり
前橋 矢沢 春子

炎天や拾ひゆきたる風の道
貪りし樹液にまみれ金亀虫
飛びたちて天道虫でなくなりし
高崎 並木 秋野

小鰯刺空港近き海占拠
鰯刺の果無き空やカメラの日
鰯刺の群れる海原見て飽かず
大垣 伊藤 弥生

いろいろな吐息の地上雲の峰
仲間得て大胆なりし水遊び
山門をくぐれば蓮の真昼かな
安中 唯野 千代

見残して巨大な茄子となりけり
ライダーの倒れて曲がる夏山路
幼児の言葉増えゆく雲の峰
藤岡 岸 まり子

日傘寄せ合ひて笑ひのこぼれ来る
山に生れ山を征服雲の峰
盛り分けてどれも偶数さくらんぼ
前橋 成田 圭子

炎帝の風格示す日の出かな
燃ゆる日は私の味方やいと花
夜のしじま破る水音や露時雨
高崎 田口 莉子

鳴き交はすおながどりなり夏木立
さるすべり強き日射しに咲きはじむ
涼もとめ鳥も寄り来る大樹なり
伊勢崎 青山 麻子

200K梅漬け終へて一息を
落ちし梅シロップ漬けに瓶重ね
一輪の紅蓮豊か法の池
伊勢崎 大澤 和世

伊勢崎 柿沼よしの
覇氣貫ふ小さき池の金魚より
茂りたる木立の中の古利かな
鬱蒼と大樹の影の涼しさよ

伊勢崎 笠原 公子
蓮の花ちよっぴり風を捉へゐて
踏み入りて羽化した蟬を驚かす
六地藏視野の限りに黒揚羽

伊勢崎 小林喜代子
やはらかき日射しをのせて百合の花
蓮の花急ぎて落つる浄土池
堂縁に足投げ出して端居せり

伊勢崎 小峰 史子
緑陰の風を集めて堂縁に
蟻の列何を願ひて石仏に
朝涼し肌に馴染みし野良着かな

太田 酒井美恵子
金亀虫飛び立つ時の羽根光り
獲物連れどこまで続く蟻の道
蜘蛛の囿や細きレースの底力

太田 高橋かずえ
緑陰で休んで一步動きだし
片陰を探して歩く昼下がり
日焼して白い歯ばかりの笑顔かな

高崎 中里見 樞
颱風の慈雨をもたらしくれにけり
颱風のもたらす凌ぎ易さかな
颱風の東北それて去りにけり

高崎 佐藤 静子
噴水も退屈さうに森の昼
噴水の流れば子らの天国に
単調な噴水の音に安らぎを

高崎 浅田 祥子
日に透ける森の入り口合歓の花
空蟬の数に感動太き幹
定例の同窓会やビール酌む

藤岡 小田 満義
鏡田の一夜限りに夏の月
雪溪の抱く瀬音の勇みけり
夢みしは明日の頂登山宿

高崎 湧井 久恵
あれこれもねじれてしまふ日の盛り
青胡桃まだ青春の味のしめ
蟻穴の出入に掟ありにけり

藤岡 木下 薫
闇揺らし線香花火の爆ぜる音
サングラスはづし我が身を取り戻す
おはやうと歩幅涼しく抜き去りぬ

前橋 相沢 富子
濁りても涼しき川の音であり
雑草のますます元氣早にも
池の面に冷やされてゐる夏の月

前橋 清水サヤ子
五月雨の傘の雫が衿ぬらす
かき氷口に入るより早く解け
田んぼから清涼の風渡り来る

前橋 鈴木恵三郎
いのち繚乱珊瑚産卵月涼し
やんちや坊重なりあってさくらんぼ
江戸切子さくらんぼうが燦然と

前橋 鈴木 令女
二つ三種のまじりて胡瓜もみ
連日の猛暑の宵の赤い月
酢醤油を少し濃いめに心太

前橋 高橋テル女
鰯広の姉の手作り夏帽子
のびなやみ朝顔の蔓宙に浮く
仙人掌の紅を尽くしていつせいに

前橋 高草木君女
炎暑今日吾を生み給ふ母に供花
たをやかな浴衣姿よ恋探す
太き髭もろこしやはき粒を守る

前橋 町田みどり
平和への篝火であれ夾竹桃
観音の中は氷室に居る如し
白百合やカサブランクの女優の如

前橋 鈴木 涼美
蟻の道翅の彩り渡り行くる
全身の毛穴広げる大暑かな
喜雨の音大地静かに覚醒す

渋川 山本 素竹
お弁当胡瓜の音が聞こえる
木洩れ日の数より病葉の黄色
日蔭なくなればほどけてあめんぼう

前橋 伊藤 涼志
ひと雨を欲しがってゐる草いきれ
遠山を礎石としたる雲の峰
鳶の輪のけだるき真昼油照

投句募集

土筆集は、あくまで皆様の作品の発表の場です。
日頃作った作品の中から、ご自分の好きな句を
表してみてはいかがでしょう。

投句 三句、葉書、メール、ファックス
締切 毎月末まで、事務局

〒371-0811 前橋市朝倉町三一五―三十七

TEL 027-261-2297 Fax 027-261-2298

メール tukusi@clay-kotobuki.co.jp

素竹一言

六十四号より

同じ色草の仲間のバツタ飛ぶ

草と同じ色をしているバツタ。そのバツタは「草の仲間」なのでであろうと感じた作者。発想の面白さが一句となりました。

玉葱の伏して岳麓新たなり

玉葱は熟すと一斉に地上部分が倒れます。それが景に動きをもたらし、「岳麓新なり」と句になりました。大きな景色が見えて来ます。

牡丹の吐息と共に昏れにけり

武骨な男供と違って、花を愛するご婦人方には、その花の吐息さえ感じられるのでしょうか。牡丹の大きさ、見事さが描かれています。

暫くは鏡面の代田かな

田植の前の代田の静けさが描かれ、数日後の田植の忙しさを暗示させています。農作業を良くご存じの作者でしょうか。

竹林の風が舞ひ込む竹落葉

開け放してある玄関に入ってきた竹落葉。竹林の風が入ってきたのだと俳人の目。竹林に住まうたたたずまいが想像されます。

草の間に風を吹き入れ夏の蝶

風もなければ動きもなく、夏のじめじめした大気。そんな草草の隙間に、蝶は風を吹き入れていると見た作者。独特な感性か。

蜘蛛の子の散りても母の糸の中

小さい小さい蜘蛛の子の固まりが何かに驚き解けるとき、それでも張り巡らされた親蜘蛛の糸の中だと。「母」としたのが眼目。

以上

メール句会

六月分

末摘花 選

五月闇手着かぬままの夜明けかな

みさほ

五月闇のなかに短夜を内臓され上手く詠まれています
普通選

一汗をかけば人間正直に
亡き兄の声不意にする梅雨晴間
誠哉 選
公徳
美伊

配車する手続重し梅雨曇
多くの年配者の嘆きが伝わってきます。身につまされました。転ばぬ先の杖。
普通選
公徳

断腸の目清く正しく美しく
庫裏軒に7人家族のツバメの子
小町選
かきむすめ

尺取の弄ばれて怒りけり
動きに愛嬌がある尺取虫。小さな虫の感情の様子がよくあらわれています。
普通選
公徳

裏腹な世辞も聞いている花菖蒲
一汗をかけば人間正直に
空蟬選
公徳

柔肌を吸ひて満ちたる蚊の行方
柔らかな子どもか女性の肌を満足するまで血を吸って去って行った蚊の行方？。想像をもたらして終わる句、もし、現れれば直ぐに撲殺されるでしょう。余韻を残す面白さにひかれ頂きました。
普通選
小町
誠哉

求愛の答えは無言牛蛙
結局は何も出来ずにゐる暑さ
愛選
みさほ

柔肌を吸ひて満ちたる蚊の行方
柔らかな子どもか女性の肌を満足するまで血を吸って去って行った蚊の行方？。想像をもたらして終わる句、もし、現れれば直ぐに撲殺されるでしょう。余韻を残す面白さにひかれ頂きました。
普通選
小町
誠哉

求愛の答えは無言牛蛙
結局は何も出来ずにゐる暑さ
愛選
みさほ

柔肌を吸ひて満ちたる蚊の行方
柔らかな子どもか女性の肌を満足するまで血を吸って去って行った蚊の行方？。想像をもたらして終わる句、もし、現れれば直ぐに撲殺されるでしょう。余韻を残す面白さにひかれ頂きました。
普通選
小町
誠哉

求愛の答えは無言牛蛙
結局は何も出来ずにゐる暑さ
愛選
みさほ

柔肌を吸ひて満ちたる蚊の行方
柔らかな子どもか女性の肌を満足するまで血を吸って去って行った蚊の行方？。想像をもたらして終わる句、もし、現れれば直ぐに撲殺されるでしょう。余韻を残す面白さにひかれ頂きました。
普通選
小町
誠哉

求愛の答えは無言牛蛙
結局は何も出来ずにゐる暑さ
愛選
みさほ

柔肌を吸ひて満ちたる蚊の行方
柔らかな子どもか女性の肌を満足するまで血を吸って去って行った蚊の行方？。想像をもたらして終わる句、もし、現れれば直ぐに撲殺されるでしょう。余韻を残す面白さにひかれ頂きました。
普通選
小町
誠哉

求愛の答えは無言牛蛙
結局は何も出来ずにゐる暑さ
愛選
みさほ

柔肌を吸ひて満ちたる蚊の行方
柔らかな子どもか女性の肌を満足するまで血を吸って去って行った蚊の行方？。想像をもたらして終わる句、もし、現れれば直ぐに撲殺されるでしょう。余韻を残す面白さにひかれ頂きました。
普通選
小町
誠哉

求愛の答えは無言牛蛙
結局は何も出来ずにゐる暑さ
愛選
みさほ

柔肌を吸ひて満ちたる蚊の行方
柔らかな子どもか女性の肌を満足するまで血を吸って去って行った蚊の行方？。想像をもたらして終わる句、もし、現れれば直ぐに撲殺されるでしょう。余韻を残す面白さにひかれ頂きました。
普通選
小町
誠哉

求愛の答えは無言牛蛙
結局は何も出来ずにゐる暑さ
愛選
みさほ

柔肌を吸ひて満ちたる蚊の行方
柔らかな子どもか女性の肌を満足するまで血を吸って去って行った蚊の行方？。想像をもたらして終わる句、もし、現れれば直ぐに撲殺されるでしょう。余韻を残す面白さにひかれ頂きました。
普通選
小町
誠哉

求愛の答えは無言牛蛙
結局は何も出来ずにゐる暑さ
愛選
みさほ

柔肌を吸ひて満ちたる蚊の行方
柔らかな子どもか女性の肌を満足するまで血を吸って去って行った蚊の行方？。想像をもたらして終わる句、もし、現れれば直ぐに撲殺されるでしょう。余韻を残す面白さにひかれ頂きました。
普通選
小町
誠哉

求愛の答えは無言牛蛙
結局は何も出来ずにゐる暑さ
愛選
みさほ

柔肌を吸ひて満ちたる蚊の行方
柔らかな子どもか女性の肌を満足するまで血を吸って去って行った蚊の行方？。想像をもたらして終わる句、もし、現れれば直ぐに撲殺されるでしょう。余韻を残す面白さにひかれ頂きました。
普通選
小町
誠哉

様です。

普通選

草笛が居場所知らせてをりにけり
一汗をかけば人間正直に

のどか選

特選

露涼し座禅に籠る二少年

露涼しの季語が効いている。

普通選

裏腹な世辞も聞いている花菖蒲
草笛が居場所知らせてをりにけり

美伊選

特選

柔肌を吸ひて満ちたる蚊の行方
暑い血の流れを感じました。良い句だと思いま

普通選

海風にのせる島歌沖繩忌
消えそいで振り返りみる月見草

みさほ選

特選

海風にのせる島歌沖繩忌

戦争の傷跡が生々しく残る沖繩の復興から日本
に返還された歴史は忘れることは出来ない。

普通選

梅雨の入り城の礎湿りをり
求愛の答えは無言牛蛙

東原

藤の丘句会

七月九日

伊藤 涼志選

棲むものに懐広げ草茂る

抜け殻に少し温もり蜻蛉生れ

なめくぢの去りてもなほの存在感

突然に落ちて丸まる毛虫かな

旅立ちの羽根柔らかく蜻蛉生れ

水の夢空へと広げ蜻蛉生れ

手と足と踏ん張ってやご蜻蛉生れ

蜻蛉生れ透明な色背負ひたる

溜め池はやごの住みかや蜻蛉生れ

よし子

空蟬

公徳

空蟬

美伊

空蟬

小町

小町

かきむすめ
空蟬

かきむすめ

かきむすめ

東原
小町
以上

夏草や踏み込む一步拒みたり
蜻蛉生れ初飛行する水の上

炎帝も己が力を計りかね
蜻蛉生れすぐに水辺の恵み受け

水の星乾きしすきま蟻地獄
蜻蛉生れ神祕の色の世界持つ

夏草ややごの抜け殻柔らかし
川蜻蛉笹に止まりてストレッツ

草いきれ土の悲鳴の溢れいで
十葉や木下に集ひ風を呼ぶ

知りながら近づいてみる蟻地獄
青田風どこか音符のあるやうな

炎帝に晒す二の腕太々と
蟻地獄気長な時を満喫す

踏ん張った六肢放たれ蜻蛉生る
梅雨明けの空の明るさ足元に

特選

世の汚れ届かぬ水辺蜻蛉生れ

普通選

地中より溢れ明るき山清水
蟻地獄気長な時を満喫す

炎帝も己が力を計りかね
休みなく扇動いて風となる

抜け殻に少し温もり蜻蛉生れ
落ちてまた這ひずり上がる毛虫の気

梅雨明けの空の明るさ足元に
炎帝に晒す二の腕太々と

蜻蛉生れ抜け出す殻の泥だらけ
飯島加津枝選

特選

世の汚れ届かぬ水辺蜻蛉生れ

普通選

炎帝も己が力を計りかね
なめくぢの沈思に森の息を止め

旅立ちの羽根柔らかくとんぼ生れ
ぬけ殻に少し温もり蜻蛉生れ

草いきれ土の悲鳴の溢れいで
蜻蛉生れ小さき花に呼ばれをり

よし子

洋治

和子

満義

加津枝

カウ子

カウ子

加津枝

和子

涼志

加津枝

志帆

志帆

志帆

志帆

涼志

満義

涼志

カウ子

よし子

舟山カウ子選
特選

青田風どこか音符のあるやうな
新しき風の生まるる古扇

蜻蛉生れやごは風化を余儀なくす
人の世と別の匂ひや木下闇

蟻地獄気長な時を満喫す
蟻地獄期待はせぬと平常心

世の汚れ届かぬ水辺蜻蛉生れ
新井良美選

水の星乾きしすき間蟻地獄
涼風の呼ぶあてのなき小道かな

新しき風の生まるる古扇
草いきれ土の悲鳴の溢れいで

草の原小さき灯ともす蛇莓
蜻蛉生れ透明な色背負ひたる

人の世と別の匂ひや木下闇
松本和子選

新しき風の生まるる古扇
青深く目は新しきとんぼ生れ

棲むものに懐広げ草茂る
人の世と別の匂ひや木下闇

世の汚れ届かぬ水辺蜻蛉生れ
水の星乾きしすき間蟻地獄

蟻地獄期待はせぬと平常心
小田満義選

踏ん張った六肢放たれ蜻蛉生る
蜻蛉生れやごは風化を余儀なくす

水の星乾きしすき間蟻地獄
なめくぢの沈思に森の息を止め

蜻蛉生れ自在に引きし流線美
青田風どこか音符のあるやうな

夏草や踏み込む一步拒みたり

よし子

和子

涼志

涼志

涼志

涼志

涼志

満義

和子

涼志

カウ子

涼志

涼志

涼志

涼志

良美

涼志

涼志

涼志

洋治

堀越よし子選

特選

蜻蛉生れやごは風化を余儀なくす

普通選

思春期や鋭角ばかり青芒

山の風汗の流れをゆるくして

落ちてまた這ひずり上がる毛虫の気

蜻蛉生れ自在に引きし流線美

蜻蛉生れ神秘の色の世界持つ

苛立ちは誰にもあるさと汗を拭く

特選

落合 洋治選

普通選

蟻地獄期待はせぬと平常心

地中より溢れ明るき山清水

色淡く羽根も小さくとんぼ生れ

草先に毛虫もぐもぐ宙めざし

蟻走る獲物求める早さかな

青田風どこか音符のあるやうな

憧れの人に变身サン格拉斯

特選

細谷 志帆選

なめくちの沈思に森の息を止め

普通選

蜻蛉生る楚々と飛び立ち風をよみ

青深く目は新しきとんぼ生れ

水の夢空へと広げとんぼ生れ

蜻蛉生れ自在に引きし流線美

踏ん張つた六肢放たれ蜻蛉生る

水の星乾きしすき間蟻地獄

互選結果

伊藤 凉志選

山に生れ山を征服雲の峰

川幅の涼しさ運びくる流れ

パラソルをくるくる回し風を呼ぶ

前橋ホトトギス会

七月十日

ぐんま男女共同参画センター

凉志

薫

志帆

志帆

良美

カウ子

カウ子

良美

志帆

志帆

加津枝

カウ子

カウ子

よし子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

花火屑夜空の華を地に沈め
川風の涼しさに酔ふ汀かな
初蟬や木漏日といふ金の色
太陽に感電しさう炎天下

花火屑そこは河原の行き止り
雲の峰些細なことは忘れやう
脇水とかけ合ふ夕立濁りかな
濁りみて涼しき川の音であり

空いっぱい育ちざかりの雲の峰
力こぶあり余りたる雲の峰
川へ行く身にまとひつく草いきれ
辛抱を悟られず行く蟻の道

強き日や夕立濁りの川豊か
炎帝に仁王立ちする河原かな
萍の一片にありし重さかな
夏の川山の靈気を流しくる

空碧し草矢へら胸へ来て
草いきれ踏み越え行きて川風に
水音の暗き底から川涼し
少し見ぬ間にふくれ雲の峰

傾けし日傘に空の青さかな
いろいろな吐息の地上雲の峰
食欲の衰へ知らぬ毛虫かな
待つ雨は降らず蛙の声高き

屈かねどハートめがけし草矢かな
天国に行けば乗れさう雲の峰
雲の峰動かぬやうで変わりけり
浮草や本流遠くさまよへる

皆集ふ定員のなき緑陰に
限りなく空を伸ばして雲の峰
あめんぼう足跡のなき水の上
ひた増ゆる夕立濁りの流れかな

炎天や拾ひ行きたる風の道
相沢 富子選
日傘寄せ合ひて笑ひのこぼれ来る

濁りみて涼しき川の音であり
天田 利子選
萍の一片にありし重さかな

門倉 博子選
木下 薫選

利子

久子

郭子

房枝

富子

とし子

とし子

とし子

とし子

とし子

とし子

とし子

とし子

とし子

とし子

とし子

とし子

とし子

とし子

とし子

とし子

とし子

とし子

とし子

とし子

とし子

とし子

とし子

とし子

とし子

とし子

とし子

とし子

上向きの蛇口や夏の水飲み場
おはやうと歩幅涼しく抜き去りぬ
鈴木 涼美選

片陰の途切れ日向に投げ出され
太陽に感電しさう炎天下
竹市まち子選

雲の峰些細なことは忘れやう
竹内 友子選
きつと眼の笑つてをりしサン格拉斯
唯野 千代選

下心ありて飛ばない草矢かな
田村みつこ選
坂東太郎昨夜の夕立濁りかな
角田 房枝選

日傘寄せ合ひて笑ひのこぼれ来る
並木 秋野選
限りなく空を伸ばして雲の峰
成田 圭子選

力こぶあり余りたる雲の峰
星野 久女選
散らばれる夢の果てなる花火屑
真鍋 貴子選

浮草や本流遠くさまよへる
吉田 鈴江選
空碧し草矢へら胸へ来て
自句自薦

奥利根を削りて夕立濁りかな
空いっぱい育ちざかりの雲の峰
大河の夕立濁りや川豊か
ひた増ゆる夕立濁りの流れかな

片陰のだんだん逃げてゆく真昼
今はもう過去となりゆく雲の峰
風死んでゐる片陰を離れたり
梶子の香や思ひ出は封じ込め

天国に行けば乗れさう雲の峰
炎帝の迷はず降りし川広し

秋野

薫

圭子

房枝

房枝

とし子

房枝

房枝

房枝

博子

博子

博子

博子

博子

博子

博子

博子

博子

博子

博子

博子

博子

博子

博子

博子

博子

博子

博子

博子

博子

博子

博子

博子

門倉 博子選

空蟬の朝を迎へし高さかな

普通選

收穫を梅ジュースとし振る舞へり

蟻穴の出入に掟ありにけり

全身が汗に浸かつてある心地

炎帝の力及ばぬ大擗

野の草の瘦せて行きたる早かな

忠実な衛兵置きて蟻の穴

特選

空蟬の落ちぬ軽さのすがる幹

普通選

あれこれもねじれてしまふ日の盛り

收穫を梅ジュースとして振る舞へり

金亀虫樹液旨いか吾も舐めて

空蟬を遙かにしたる穴の数

ひと雨を欲しがってある草いきれ

病葉を四阿に寄せて見舞ふ風

木下 薫選

樹液まだ貪り足らぬ金亀虫

普通選

ひと雨を欲しがってある草いきれ

收穫を梅ジュースとして振る舞へり

青胡桃乳の香残る舌触り

指先で舐むる樹液や夏盛ん

空蟬の落ちぬ軽さのすがる幹

蟻穴に鈍き威光の蠢きを

特選

旱天に土気を高めし葎かな

普通選

緑蔭に積み上げてある別世界

不本意に落ちし青胡桃の硬さ

青胡桃歯応へのなき若さかな

穴を出る蟻を待ちたる時間かな

初蟬の口調はつきり届き来る

ぼったの子広野の冒険始まりぬ

吉田 鈴江選

病葉を四阿に寄せ見舞ふ風

特選

裸子の四頭身の躍動す

青胡桃歯応へのなき若さかな

出る汗のまだあるのかと走る人

樹液まだ貪り足らぬ金亀虫

一族を守る気概を穴の蟻

万緑や溢れるほど樹液かな

中嶋 孝子選

大髯を撓らせ天牛様とほる

普通選

抱きかかへられて終りし水遊び

炎帝の力及ばぬ大擗

青ぐるみ割り青き味確かめり

乳色の母の味なるくるみの実

蟻穴の出入に掟ありにけり

秋近し森に知つたる昨日今日

福田 信子選

野の草の瘦せて行きたる早かな

普通選

空蟬の落ちぬ軽さのすがる幹

空蟬の朝を迎へし高さかな

病葉を四阿に寄せ見舞ふ風

一族を守る気概を穴の蟻

蜘蛛の囀る森走り抜く光かな

旱天に土気を高めし葎かな

鈴木 涼美選

日盛や森は木影を重くする

普通選

蟻穴の出入に掟ありにけり

ひと雨を欲しがってある草いきれ

蟻穴に鈍き威光の蠢きを

どる遊びへと気がる水遊び

素っぴんで居る他はなき猛暑かな

ぼったの子広野の冒険始まりぬ

湧井 久恵選

空蟬の落ちぬ軽さのすがる幹

特選

空蟬を遙かにしたる穴の数

野の草の瘦せて行きたる早かな

万緑や溢れるほどの樹液あり

蟻穴の深さに威厳隠し持つ

口中に残るせつなき青胡桃

緑蔭や極楽よりの風届く

唯野 千代選

緑蔭に積み上げてある別世界

普通選

穴を出る蟻を待ちたる時間かな

切り口の匂ふ青さや夏盛ん

三重苦草木ねじれし早かな

一族を守る気概を穴の蟻

昼寝して午後を短くしてをりぬ

初蟬を内耳の声とききをりし

惠流句会

平成二十三年七月二十二日 (金)

於 桑町会館 二階

相澤富子選

友見舞ふ道は青田に変わり居り

連日の猛暑の宵の赤い月

肌に触る風清々し夕立あと

炎天のはるかに聳えスカイツリー

仙人掌の紅を尽くしていつせいに

観音の中は氷室に居る如し

塀囲む静かな住まひ百日紅

酢醬油を少し濃いめに心太

鏝広の姉の手作り夏帽子

鷺草の飛び立たむとす石の庭

平和への篝火であれ夾竹桃

酢漿草を吸ひて遊びし頃もあり

二つ三種のまじりて胡瓜もみ

涼 志

涼 志

涼 志

利 美

涼 美

孝 子

孝 子

孝 子

孝 子

涼 志

久 恵

孝 子

孝 子

久 恵

博 子

博 子

信 子

鈴 江

鈴 江

みどり

みどり

令 女

令 女

君 女

令 女

令 女

みどり

令 女

令 女

令 女

令 女

令 女

令 女

令 女

令 女

高橋かずえ選

特選

獲物引く蟻の道草列離れ

普通選

松の根にでで虫の殻うす光り
年齢は風に飛ばして涼しく居
落下する梅の輝き拾ひ込む
蟻の列踏まれてばつと散りまどふ
蓮の花急ぎて落つる浄土池
陽の匂ひからむ日傘をたたみけり

涼志

公子

和世

美恵子

喜代子

史子

火曜俳句会

伊藤 涼志選

七月十二日

中央公民館

亡き夫に伝へたきこと星祭り
海底を抜けて梅雨なき北海道
湖に生れてむらさき夏の蝶
青田風入れてふくらむ電車かな
沈香の香りかすかに朝曇
折る鶴に復活祈り星迎
片陰を探し路行く午下り
短夜や再び見たき夢ありし
雨読の眼いやす紫陽花淡き色
ゆるぎなき青田となりて農休み
絶え間なき瀬音聞き入る端居かな
風鈴の音に湧き出づ遠き日々
宇宙なるカンバス自在雲の峰
遠くまで村青々と半夏生
麦の秋豊作の香の風連れて
山彦の涼風連れて戻りけり
故郷は永久にまほろば梅雨開ける
大夕立近く匂へる土埃
烈日や登りつめたる立葵
朔太郎通りに拾ふ落し文
睦み合ふ塩からとんぼ朝の風
いくたびも墓を振り向く白日傘
月涼し星に願ひのオルゴール
十葉の十字際立つ夕日かな
流れ行く先はいづこや落し文

満枝

一子

幸子

恵美子

智榮

治子

清子

幸子

恵美子

明子

満枝

百合子

まさを

明子

ヒナ

多津恵

まさを

恵美子

明子

ヒナ

多津恵

夕闇に舞妓の侍る床涼み
カーテンとトマト跳らせ風通る
今朝の風江戸風鈴の音さそふ
余生なほ健やかであれ枇杷酒漬
からだごと蜜吸ひにけり紋白蝶
俄雨去りし中天夏の月
外は雨風あるらしき夏のれん
表秋や雲に急かされ日を送る

ご協力御礼 七月分

群馬の森俳句会様

藤の丘句会様

ご協力有り難く感謝申し上げます。

六千円

四千五百円

連句作品

短歌行「翡翠」の巻

翡翠の川面飛び出す早さかな

風やわらかくわたる青葙

幼児のままごと遊び広縁に

ホットケーキの蜜をたつぷり

月光に影をくつきり稲葉山

葉草求めたどる柚道

本心を新酒の酔を借りて言い

ペアルックで床の中まで

日本湧くまでしこジャパン世界一

平和の鳩をとばす手品師

花筏ゆくえは知らず波まかせ

宙の彼方へこぎしブランコ

ナオ

声あげて遠足の子ら走りゆく

犬をもらってみんな早起き

映画にと落第忍者乱太郎

観光バスのガイド岡惚れ

懐妊をようやく果たし入籍へ
友と一緒に座禅写経と
鬼がわらくつきり浮ぶ寒の月

捌 篠崎 光江

高橋千代子

箭内 敏枝

伊藤 稜志

伊藤 稜志

伊藤 稜志

伊藤 稜志

伊藤 稜志

伊藤 稜志

伊藤 稜志

伊藤 稜志

伊藤 稜志

伊藤 稜志

伊藤 稜志

伊藤 稜志

伊藤 稜志

伊藤 稜志

伊藤 稜志

伊藤 稜志

雪の斜面に描くシユプールの
ナウ
現代の流浪の民に仕方なく
地デジテレビを買ってドラマを
ロケットの島を埋めし花の雲
夢の便りを運ぶ蝶々
平成二十三年七月二十四日首尾
於 館林市文化会館

短歌行「深海魚」の巻

遊ぶ児の深海魚となる木下闇

憩うベンチに渡る涼風

マラソンを夢中になつて競うらん

珈琲の香に心なごませ

ウ

月出でて光を返す芒の穂

村の芝居は爺が主役で

カッブルのひそひそ話威鎮

不意に抱きつく彼女かわいく

東電と議員の給与気にかかる

本日終了アナログテレビ

花堤昔の郷を偲びつゝ

平和折れば池に亀鳴く

ナオ

大掃除家族総出で賑やかに

入浴剤は草津温泉

人目ひく魅力の笑窪武器にして

モデルはみんな同じ体型

ダックスの黒と茶とが長椅子に

ビデオカメラを廻しつづける

中天に凍てたる月の皓々と

ちびりちびりと熱燗を酌む

ナウ

今年また定期健診しつかりと

庭に燕の翻る頃

落慶の天守をつゝむ花吹雪

羅漢眠れる山笑う裾

平成二十三年七月二十四日首尾

於 館林市文化会館

鈴木 タケ

鈴木 タケ

阿部 しづ江

須藤 サイ

田部 井窓月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

短歌行「石清水」の巻
頂上へ喉を潤す石清水
溪澄みわたる郭公の声
生地までも自慢のピザを焼きあげて
おはじき遊び祖母に教わる

規夫
若林 規夫
若林 規夫
加藤 陽子
三井 静怡
山中佐津喜

名月のそのまた先に宇宙あり

一級品の新絹の艶

古酒酌んで演劇論の君素敵

知らんぷりして盗む唇

中国の新幹線が脱線し

記録を残し魁皇引退

花便和紙に詞は万葉風

抓んだ望潮穴に逃げ込む

ナオ

帰郷した善光寺では出開帳

サプリメントに振り回されて

氏索性互いに知らぬツアー客

暗号示すレシートの中

柔らかき肉置に身を重ね合い

辞めて辞めてと叫ぶ与野党

里山の月に貌出すまみだぬき

厨の窓にしづり雪舞う

ナウ

パソコンで交通網を検索す

当るも八卦当らぬも又

満開に酔って候花見船

翁讚える夢の初虹

平成二十三年七月二十四日首尾

於 館林市文化会館

俳文

七夕

細谷 志帆

暑い日が連日のように続くなか、扇風機を背中に折り紙で輪飾りを作った。いよいよ七夕。週末にみんなで願い事を吊したり、たくさんの飾りをつけようと計画するだけで、とても楽しい気分になる。竹こそ本物は用意できないが。

小学二年生のころ、祖父と切り出した竹を自宅

まで運んだことを思い出す。我が家は町中で、車の通りも多い。その中を祖父は悠々と背の高い杖を引きずりながら、自宅を目指し大きな歩幅で歩いて行った。その後ろを私はお供するのだから、なんだか恥ずかしい。祖父が堂々とするほど、私は距離を広げていた。そういう時に限り、同級生と会うものである。同級生に馬鹿にされるのではないかと、視線を気にする自分がとても嫌だった。今思えば、本物の竹で七夕を迎えることができるなんて本当に恵まれている。竹を引きずり歩いたことも誰にもできない経験。年長者から教わる風習を体で体験できただけでもありがたい。

今年の我が家の願い事。娘は愛猫のこと。息子は家族のことであった。私の願い事は楽しく遊ぶこと。自分が一番自己中心であると再確認した七夕であった。

七夕の願い大きく夜空まで 志帆

麦 秋

吉田鈴江

麦秋とは 小津映画の世界、また欧米の小説にも甘美に描かれてますが、私にとつては間違いないやってくる過酷な労働、心理作用と相まって不安定なもの悲しさが去来します。

そんななか野に出てみれば、俳句の季語、凶鑑にまさる事例に出会えるのです。

太鼓破れ子蜘蛛散り散りひとり旅
コンバインは優れもの、千坪の麦田をたちまち刈上げ流し入れた麦粒は、運搬車にて乾燥機に運ばれる。

田水張る頃かと蝦蟇の見参す

溝浚は私の仕事。必ず蛇か蝦蟇が泥の中に潜み、

気のある大蝦蟇と出会う。今年には背に金筋の入った風格のある大蝦蟇と出会う。

麦出荷粒々同じ顔をして

小麦の出荷は、田植えの後指定日の前日から作業に取りかかる。乾燥の度合いに神経をつかい、麦藁の混入は許されない。昔の唐箕を電動にし、全自動に近い作業で黄金色に輝く小麦の山を築く。食品の安全供給に高齢者の甘えは許されない。

一ヶ月余の農繁期の合間には梅漬け、馬鈴薯掘り

をし、田植えのあと田畑の除草、芝刈りなど一応終わらせる。村境に八丁締め幣が青竹に吊るされ青田風に翻る。いわゆる農休みを迎える。

五月雨

舟山カウ子

日本には「四季がはっきりしている」と、言われているが、近年の日本の気候には異変が起きて

いる。

五月というのに三十℃の真夏日になってみたり、六月というのに急降下して四月の気温になってみたり、その急変化には体がついて行かない。

特に今年の五月は雨が降ったり晴れたり、穏やかに暖かさを感じたり、一日一日と緑がふくらんでいく気候ではなかった。なかなか雨が降ってはくれない。一面が乾燥しきっている。気温だけが上昇しても地温は上がらない。

そんな中家庭菜園を楽しんでいる私であるが、この春は種まきしても気温は適度を保ってはいないが、雨量が足りなくて発芽してくれない。朝に晩に水をやっても「焼け石に水」状態で、むしろ水やりをやらない方が良い日もあった。

雑草の伸びもいつもなら畑一面緑になるところだが、今年は草も虫も土の中で息をひそめて雨を待つ状態が続いている。珍しく私の除草作業が草に追いついていた。

六月になるといよいよ五月雨が降り出した。畑のあちこちで「待ちくたびれたよ」と声が聞こえてくるようであった。ナスやキュウリ、ピーマンやトマト等々ようやく発芽し、成長を始めた。

息を止めてじつと辛抱しこの時を待っていたものたち、野菜も雑草も虫も花たちも五月雨のシャワーを浴びていた。又、木々や土の中の虫たちすべてが、送れた季節を取り戻すかのように躍動感に溢れ、深く深呼吸し、生育も一日増しに加速して行く。

可能な限り消毒は避け共存を目標にしている。人間は我慢しながらばやき、そして知恵を振り絞ってあらゆる方法を考え実行するが、結局のところ人間も他の生き物たちも天の恵を待つしかない。

五月雨や生き物たちの深呼吸 カウ子

毛虫

毎年の事ながら、庭木に付く毛虫との闘いはきりがない。特に山毛櫨に付く小さな小判状の毛虫は始末が悪い。知らない間に、一晩で枝一本が食い尽くされてしまう。スケスケの葉っぱに気がついたときはもう遅い。周りの枝に散ってしまい、見つけるのに一苦労する。見つけたら見つけたで退治するのにこれまた大変。うっかりして肌に触れようものなら、ビリビリッと電気が走り抜ける。その痛いことと言ったらない。

脚立に登り、葉の裏にはりついていてる物体を見つければ、葉っぱごと摘み取ってビニール袋に入れる。その数も何十枚にもなってしまう。

脚立の一番天辺にバランスを取りながらの作業は当然危険も伴ってくる。「お父さん気をつけてよ。歳なんだから」などと余分な声がある。「もつと右左、上そこにいるのが見えないの」とか、外野がうるさい。近くに檜や椿など雑木があるがそれには絶対に付かない。この山毛櫨だけがお気に入りらしい。

植えたときは、背丈ほどだったが、十数年も経つと二階のベランダを越えて、縁先に日陰を提供してくる。今年の冬には余分な枝を剪定しなくてはと密かに考えている。

毛虫にも好きな葉のあり高さあり 涼志

陶芸で作る楽しみ

土に親しみながら創作の楽しみを味わってみませんか。陶芸教室の企画開催や運営の仕方を丁寧に説明しながら実作の流れを作ります。焼成に関しましては会員の方々が気軽に応じます。自作の器を実生活で活かし乍ら楽しんでみて下さい。

連句会のお誘い

あまり知られてはいませんが座の文学の元祖でもあり大衆文芸の俳句の元祖でもあります。感じ

取った事柄をお互いに付け合いながら進め基本的には歌仙という形式で三十六句付けて巻き上げるわけです。五六人で座を形成して巻き上げるまでの時間と空間を共有するわけですから、大変ユニークな遊びです。スロウライフの一環としても是非味わってみて下さい。

俳句会は如何ですか

自然の移り変わりを肌で感じ取りながら楽しく俳句を作ってみませんか。どこでもいつでも出来る俳句は今まで味わったこととは異世界を感じ取ることが出来ます。初心者は大歓迎です。

投句募集

土筆集は、あくまで皆様の作品の発表の場です。日頃作った作品の中から、ご自分の好きな句を発表してみたいかがででしょうか。

投句 三句 葉書、メール、ファックス
締切 毎月末まで 事務局
〒371-0811 前橋市朝倉町三一五―三十七
TEL 027-261-2297 Fax 027-261-2298

メール tukusi@clay-kotobuki.co.jp

NPO「土筆の会」ご入会案内

正会員
入会金 二千元
年会費 三千元
賛助会員
入会金 五千元
年会費 一万元

郵便振替口座番号00500-31921404
電話 027 261 2297

事務局 〒371-0811 前橋市朝倉町 3-5-37
<http://www.clay-kotobuki.co.jp/tukusi>

後記

七月も終わろうとしているそんなとき新潟県や群馬県の北部に記録的な大雨が襲った。今年は梅

雨も短くどちらかと言えば早で作物にも影響が出そうな気配でもあった。梅雨が明けると今度は猛暑で、熱中症で倒れる方々が目立ってきた。追い打ちを掛けるように節電による影響が蟻、どこでも電気製品の使用を遠慮してクーラーもろくに使わないで我慢しているような状態が続いた。

津波の後は大雨による大洪水が四国方面から始まり日本全土で大騒ぎとなっていました。本当にどうしてしまったのだろうか。

「土筆も六十五号を迎えることが出来ました」とは会員の皆様のご協力の賜と感謝と御礼を申し上げる次第です。特に毎月の「一言」を頂戴している素竹様や、新企画の俳句に投稿されて居られる方々他、大勢のご協力を骨身に感じております。今回はスペースの都合で「火曜俳句会」を掲載致しました。まだまだこれから夏の本番になり暑さも本格的になると思います。呉々もお気を付け下さい。

八月句会案内

八月十一日 土筆庵句会 中ノ沢土筆庵
八月十三日 藤の丘句会 庚申山吟行
八月十四日 前橋ホトトギス会 前橋公園吟行
八月十九日 ぐんま男女共同参画センター
八月二十一日 惠流句会桑町会館二階 午後二時
八月二十七日 群馬の森句会 群馬の森周辺
八月二十七日 木犀俳句会庚申山吟行
八月二十九日 長光寺句会 長光寺境内

TUKUSI 65号

発行 平成二十三年九月一日
発行人 伊藤稜司
発行所 特定非営利活動法人 土筆の会
〒371-0811 前橋市朝倉町三丁目5番地37
電話 027 261 2297
郵便振替口座番号00500-31921404
<http://www.clay-kotobuki.co.jp/tukusi>